

7) 平等な社会におけるテクノロジーコース

副題：倫理的かつ責任あるソーシャルメディアと AI の活用

ファシリテーター：

参加青年：31 名（日本参加青年 17 名、外国参加青年 14 名）

1. コース概要

参加青年たちが倫理的かつ責任ある AI（人工知能）とソーシャルメディアを活用し、平等な社会におけるテクノロジーに期待される役割を正しく理解し、行動に移せるようになること。

2. コースのねらい

参加青年たちはクリティカルシンキングを鍛えらるとともに、AI やビッグ・データを活用したテクノロジーが自分たちの生活にどう関わっているのか、またそのテクノロジーの限界や、どのように情報に偏りが生じるのかを知る。フェイクニュースや操作されたソーシャルメディアの情報に惑わされないための正しい知識を理解し、またプログラムの大小にかかわらず自ら対応できる術を身に付けておくことで、テクノロジーの悪用にどう対処していくかを学んでいく。

3. セッション概要

セッション 1: データと AI は偏っている	
目的とねらい	活動の内容
■ ビッグ・データと AI（人工知能）が社会で活用されている分野についての基本的な理解を深める ■ 政府や企業の例を用い、どのようにデータの偏りが生じ、AI のバイアスに繋がるのかを理解する ■ データと AI の限界を知り、そこから導き出された結果を検証するのに不可欠なスキルを身に付ける	■ グループで「AI(人工知能)」「平等」「公正」「ビッグ・データ」の国際的な定義を見出す。その後、グループごとの結果を全体で共有し合い、コースとしての定義を決める。 ■ 参加青年が事前にまとめてきたそれぞれの国におけるビッグ・データ収集に関する記事について小グループでのディスカッションを行う。その後、全体で内容を共有し、ファシリテーターがキーワードをピックアップしてホワイトボードに記入していく。そのキーワードを分野ごとにグループ化することで、国や文化を超えた共通点を導き出す。 ■ 近年におけるデータと AI のバイアス、またその悪影響の実例でディスカッションを締める。
セッション 2: フェイクニュース、プロパガンダをいかに防ぐか	
目的とねらい	活動の内容
■ 「フェイクニュース」の明確な定義について学ぶ ■ 「フェイクニュース」と信頼性のある情報源を見分けることのできるスキルを磨く ■ 世界にはどのような「フェイクニュース」が存在しているのか、また「フェイクニュース」の文化による違いを理解する	■ ファシリテーターによるスクリーンを使ったプレゼンテーション：まずはフェイクニュースのコンセプトを理解するための導入から始め、その後いくつかのニュース記事を使い、それが本当のニュースなのかフェイクニュースなのかを判断するグループアクティビティを行う ■ グループごとの発表： ① フェイクニュースのストーリーを作って寸劇形式で発表する ② ファシリテーターがホワイトボードにいくつかのキーワードを書き出し、類似したフェイクニュースをグループ化することで、様々な国で同じような戦略が使われていることを明確にする ③ プロパガンダ（宣伝）などのフェイクニュースにおける「種類」と「目的」を定義する。 ■ フェイクニュースの拡散を防ぐ方法や手段について共有する。

セッション3: 機械学習とテクノロジーにおける民主化	
目的とねらい	活動の内容
■ AI やデータがより多くの人へサービスを提供するために、少数派の人々や社会から取り残された人々に与えている悪影響についての理解を深める ■ インターネットを活用してコミュニティを強化することも抑制することもできることを理解する ■ 悪意を持ってソーシャルメディアを使うことには世論をあおる可能性があることを理解する ■ 障がい者のために活用されるテクノロジーへのアクセスやその機能までも偏りがある可能性を認識する	■ 参加青年によるプレゼンテーション：実際に取り組んでいるソーシャルメディア向け動画のコマーシャルガイドラインについて ■ グループディスカッション： ① 定義や所定の数に従って自分たちをクラスター化することで、AI クラスターについての理解を深める。 ② AI の学習が不十分であった場合には、少数派を見落としてしまう可能性があり、必ずしもグループを代表できないことを理解する。 ■ アクティビティ：Facebook のニュースフィードの投稿を自分が興味のある順に並べ替えるゲームを行い、並べ替えた基準について共有する。 *このゲームのポイントは、参加青年が並び替えた投稿にはニュースや政治的な内容が含まれていないところにあり、元々は写真を共有する目的で構築されたはずの SNS が本来の用途とは違った使い方をされた場合に、フェイクニュースや過激な意見を広めてしまう可能性があるということを参加青年たちに気付かせることが目的である。 ■ プレゼンテーション：Facebook のアルゴリズムが実際にどう機能しているかについて ■ ディスカッション：それぞれの経験に基づき、SNS を利用することによる弊害を軽減する方法を考える。
セッション4: ソーシャルメディアとテクノロジーリテラシー：世界規模のデータ収集	
目的とねらい	活動の内容
■ 大規模なデータ収集について理解する ■ 各国の様々なソーシャルメディアネットワークを知ること、自分のソーシャルメディア経験が一般的ではないことを理解する ■ ソーシャルメディアを使用することの代償を理解し、自分自身のインターネット上の存在を守るために重要なスキルを身に付ける ■ ソーシャルメディアは本質的に悪いものではなく、その代償と制限を理解し、責任をもって利用している限りは恐れるべきものではないということを理解する	■ プレゼンテーション：参加青年によるコマーシャルデータ収集と要約 ■ 参加青年たちがどんな SNS を使用しているのかを把握するため、挙手による投票でインターネットデータの傾向を探る。結果をホワイトボードに板書し、それぞれの地域でどのようなプラットフォームが使用されているのか、またその傾向の違いを理解する。 ■ グループワーク： ① 小グループで様々な SNS の特性と利用条件、またそれぞれどのようなデータが使用されているかについてのディスカッションを行う。 ② その後、内容を全体で共有し、情報をホワイトボードに書き出す。 *このディスカッションは、ユーザーにとって共有されたデータが不利になる場合もあれば、収集されたデータが有利になる場合もあるというメリットとデメリットの両方を示すことで、バランスの取れたセッションとなる。 ■ データ収集とデータギャップの課題についての事例を用いたプレゼンテーション
セッション5: 倫理的な AI やソーシャルメディアを地域社会でどのように導入するか	
目的とねらい	活動の内容
■ 倫理的 AI を活用するための取組を理解する ■ 倫理的 AI とソーシャルメディアを、自分たちのコミュニティにどう役立てることができるかについて実用的なアイデアを練る	■ 自分が持っている強みは何か、何を学び、学んだことをそれぞれのコミュニティに戻った時にどう活かすのかを個人で振り返り、ポスターを作成する。その後、グループ全体で共有する。 ■ グループでコース・ディスカッションの成果をまとめ、最終プレゼンテーションに向けての準備をする。

4. ファシリテーターのコメント

ディスカッションセッションは非常に活発で盛り多いものであり、参加青年たちとファシリテーターとの関係性も良く、また参加青年同士も互いの文化の違いを超えて交流を深めることができた。すべての参加青年がより積極的にコース・ディスカッションに参加できるよう、まずは少人数でのディスカッションから始め、それからコース全体で結果を共有するという方法を選んだ。小グ

ループでのディスカッションは、英語力に自信のない参加青年や、人前で発言をするのが苦手な参加青年たちにとっても、自分の意見をより共有しやすい環境を作り上げるといった点において非常に効果的であった。また、その後コース全体で小グループでのディスカッション内容を共有することで、すべての参加青年が互いに学び合うことができた。

本コース・ディスカッションを進めていく上で最も困

難であったことの一つは、参加青年たちのテーマに関する知識の量に大きな差があったということであろう。コンピューターサイエンスの専門職についている参加青年から、異なった業界での仕事に活かすためにテクノロジーの正しい活用法をより深く学びたいというような参加青年まで様々であった。しかし、小グループでのディスカッションという方法をとったことで、それぞれが興味のあることについて共有することが可能となり、スムーズにディスカッションを始めることができた。さらに、専門的な知識を持つ参加青年たちにそれぞれの仕事における経験を話してもらうことで、他の参加青年の興味を引きつけ、グループのメンバーにもその分野の専門家から学ぶという有意義な機会を与えることができた。ある参加青年は、SNSへ投稿するための動画を編集し、画面をスクロールする閲覧者の関心をより惹きつけられるようなガイドラインを作成するという仕事をしており、その経験についての話を共有してくれた。また別の参加青年が現在取り組んでいる、オープンクエスチョンを含むアンケートから収集したデータを分析し、その結果をまとめるために回答を分類してカテゴリー化するというプロセスについての発表の時間も設けた。コース・ディスカッションの限られた時間では、残念ながら大学での講義のように特定の議題に注力することはできなかった。しかし、参加青年たちはAI（クラスタリング

とレコメンダーシステム)に関する最低限の知識を学び、今後はそれぞれでその知識を深めていくことであろう。さらには、フェイクニュースに惑わされることなく、データに懐疑的であり、コミュニティ内に不平等をもたらすデータギャップを認識する力も身に付けることができた。そしてビッグ・データ収集とその用途、AI、SNS、フェイクニュースに関する認識は普遍的なものであること、またそれらは国や文化によって様々であるということとを互いに学び合った。彼らがこれから世界へと飛び立ち、倫理的かつ責任あるテクノロジーの活用を実践してくれることに期待したい。

コース・ディスカッションの時間以外にも、参加青年たちから内容に関しての質問を受けることがあった。その際にはできるだけ参加青年とその場で話をするようにし、また可能な時はイントラネット（船内で情報を共有するプラットフォーム）を通じてコース・ディスカッションの追加情報を提供するなどの対応をした。本コース・ディスカッションの参加青年たちは、新しい知識や考え方を習得しただけでなく、文化を超えて繋がる力を身に付けることができたと確信している。5回のセッションを通じて共にディスカッションをしたコースの参加青年同士は、きっとこういった機会がなければ出会うことはなかったのかもしれない。

サマリー・フォーラム

サマリー・フォーラムはコース・ディスカッションのまとめとしてイベント委員運営の下、2月12日に開催された。それぞれのコース・ディスカッションは工夫を凝らした発表を行い、コースを通しての学びを披露した。

イベント委員からのコメント：（日本）

イベント委員会として企画・運営に関わったが、その主な役割としては、リハーサルや発表の順番決め、タイムマネジメント、照明や音響、MCなどがあった。サマリー・フォーラムを企画及び運営したことにより、以下の反省点と改善点が見つかった。

一つ目は、タイムマネジメントについての反省点で、会場にオーディエンスを集める時間を逆算することができず、サマリー・フォーラムの開始時間が15分ほど遅れてしまった。委員会活動や、レター・グループ・ミーティングなどの比較的人数規模の集合とは異なり、240名の大人数を効率よく移動させることの難しさに気が付くことができた。プレゼンテーションといったイベントのコンテンツについて注意がいきがちであるが、スムーズなイベントの運営には、こういったロジスティックに関する準備が欠かせないことを学んだ。

二つ目の改善点として、準備時間の確保について述べ

る。プレゼンテーションの準備に与えられた期間が二日間のみと短期間であっただけでなく、準備時間が当日のリハーサルを除いた公式プログラム内で用意されていなかったために、各コース・ディスカッション・グループから不満の声を聞くことがあった。公式プログラム時間内に準備時間が確保されればこの不満も解消すると考える。

以上の2点を今回のサマリー・フォーラムの企画・運営を通して学ぶことができた。

アドバタイズメント委員からのコメント：（日本）

今年度の「世界青年の船」事業も終盤に差し掛かり、七つのコース・ディスカッションがそれぞれに学んだことを発表するフォーラムが開かれた。最初のプレゼンターは文化遺産の保護コースだった。ナショナルコスチュームをまったり、楽器を持ち寄ったりした参加青年たちが、服の背景にある家族のストーリー、自らのアイデンティティ、持ち寄った楽器や詩の背景にあるストーリーをシェアした。特に印象に残ったのは、ニュージーランド・デリゲーションのマオリ族に繋がりのある参加者の“I am the combination of everything”という言葉だ。生まれ育った国や文化、マオリの血、祖先を含め全てのものが組み合わさったものが私自身だというメッ

セージに心を打たれた。

地球環境と気候変動コースでは各国で起きている洪水や干ばつといった自然災害が紹介された。環境問題に対して自分たちに何ができるかを考えるにあたり、にっぽん丸で1日に何リットルの水が使われ、何キロのご飯が炊かれているかといったことがクイズ形式で出題された。日々生活している中でどれだけの水や電気、食料を消費しているかを知り驚いたとともに、船内にあるエレベーターを使うのではなく階段を使う、蛇口をこまめに閉めるといった身近なところからアクションを取ってい

きたと思った。

健康とウェルビーイングコースでは、ペアになった相手の目を30秒見つめ、自分にとって大切な人のことを考えるというアクティビティや、プログラムの中で感謝を伝えたい人に手紙を書くといった「落ち着く・考える」時間が取られた。感謝の手紙を書く際、私はこれまでの30日間を振り返り、つらかった時に支えてくれた相手に対して思いを綴った。手紙を通して改めてその人の優しさと温もりを感じ、どれだけ大きな支えになったかに気付くことができた。

ナショナル・プレゼンテーション (NP)

NPは参加青年が国ごとに、自国の歴史、文化、伝統芸能そして政治や経済等の社会一般について紹介することで、参加各国に対する理解を深めるとともに、自らの国の事柄について再認識することを目的として実施した。演出等は各デリゲーションに任されているが、運営補助や司会、タイムマネジメントはNP委員会によって行われた。

<NPの順番>

日付	発表した国
1月19日	日本
	バーレーン
	フランス
	英国
1月20日	ニュージーランド
	エジプト
	ケニア
	ブラジル
1月21日	ペルー
	スリランカ
	メキシコ

NP 委員からのコメント：(バーレーン)

今年度の事業でのナショナル・プレゼンテーションは船上研修開始直後に開催された。これにより参加国の文化を知る最初の窓口としてNPが機能したように思う。また、プレゼンテーションを見たことによりその後の会話につながり、参加青年は互いの文化について理解を深める機会となった。

各デリゲーションは独自の方法でプレゼンテーションを見ている青年たちに各国の文化を伝えることができた。それぞれのデリゲーションがNPにかけた努力や時間は明らかで疑いようがない。NPは全ての参加青年に各国の文化についての学びを与え、彼らのディスカッションや会話を促進した。

NP 委員からのコメント：(日本)

9月に行われた事前研修で、日本のNPのテーマを「日本から世界へ」と定めた。日本各地から集まった私たちが日本代表青年として、SWYを経て世界中に飛び出していく思いを込めた。事前研修後から本番までの3か月間に各自で用意や練習を行い、1月の陸上研修でそれぞれの演目をつなぎ合わせ、30分間のプレゼンテーションを仕上げていった。

事前研修後は対面でのコミュニケーションがとれず、もどかしさを覚えることもあった。しかし、陸上研修で全員が集まり、動き出し始めると、個々の強みが見えるようになり、そこから日本のデリゲーション内に化学反応のようなものが起きて加速度的にNPを完成させることができた。

また、各国のプレゼンテーションをサポートしたことで、連携して動くことを学べた。またNPの制作・運営の経験を活かして、新たに「SWY Open Stage」というタレントショーを企画し、成功させることができた。

アドバタイズ委員からのコメント：(日本)

与えられた時間は30分。その中で自分たちの国のことをより多く知ってもらえるように、工夫を凝らし、思いのこもった各デリゲーションのNPは、感動の連続だった。

日本の迫力のある和太鼓の演奏から始まり、日本舞踊や書道、最後にはJPY全員でよさこいを踊り、OPYも巻き込みながら、大いに盛り上がった。他のデリゲーションはクイズ、動画、劇等、様々な方法で国の地理や歴史、抱えている問題等を伝えながらも、伝統衣装を着て、華やかなダンスや、伝統的な儀式を披露してくれた。何度も衣装替えをしていたOPYは、汗をかきながら「大変だったけど、最高だった」と話し、NPに対する熱い思いが伝わってきた。

プログラムの比較的早い時期にNPが組み込まれていたため、JPYのまとまりを実感するとともに、OPYとの会話の種にもなり、良い雰囲気ですべてのプログラムをスタートさせることができた。11か国の魅力を一度に体

感できるのも、このプログラムの醍醐味だと思う。約240人のPYをまとめてくれたNP委員に感謝したい。

アドバタイズ委員からのコメント：（日本）

私は日本の文化として、和太鼓の演奏を発表した。和太鼓チームは私がリーダーとしてチームを結成し、教えて下さる団体の方と連絡を取り、練習を重ねてきた。メンバーは学生から社会人がおり、ほとんどが初心者。練習時間を合わせることや価値観のすり合わせから始めることは簡単な道のりではなかった。

演奏が始まる前はとても緊張したが、始まってからは

無我夢中で打っていた。今までで一番良い演奏ができたと思う。演奏終了後、溢れんばかりの拍手が会場に響いた。中には私たちの演奏を聴いて、涙を流している人もいた。必死に話し合いを重ね、練習してきたことが私たちの演奏に反映され、参加青年たちの心を動かせたのであれば、努力した甲斐があった。

今まで触れたことのなかった日本が誇る伝統的な楽器に触れ、参加青年たちに向けて発信ができたことは日本人として誇りである。また、発表後に、外国参加青年たちより、太鼓を打ってみたいというリクエストを多くもらい、自主活動で和太鼓レッスンを行えたことも誇りの一つである。

All-PYセミナー

All-PYセミナーは、参加青年全体にとって有益かつ関心度の高いテーマを扱うセミナーとして、航海中3回開催された。いずれの回も All-PY セミナー委員会を中心に参加青年が企画・運営した。前半の2回はあらかじめ異文化理解、リーダーシップというテーマが定められ

ていたが、後半の1回は委員会が協議を重ね、テーマを決定した。年齢や国籍、趣味や関心が異なる全参加青年が対象のセミナーであることを考慮し、一つのセミナーの中でも複数の登壇者が話すことや、ゲームや少人数でのディスカッションなど様々な活動を盛り込んだ。

日付	タイトル	内容（概要）
1月22日	リーダーシップ	PY全員が自分のリーダーシップ像を認識することを目的に、アクティビティを盛り込んだセミナーを実施
1月29日	異文化理解	船上生活を例にとり、異文化理解に関するアクティビティやパネルディスカッションを盛り込んだセミナーを実施
2月10日	モチベーションと振り返り	SWYに対するモチベーションの変化や振り返りを対話形式で行う。九つの社会問題をテーマにディスカッションを行った。

All-PYセミナー委員からのコメント：（日本）

All-PYセミナー委員では副委員長として、主に会議の進行を委員長と共に行った。初めは優秀で多様なバックグラウンドを持つPYと英語で議論をしていかなければならないことに苦しんだ。また、セミナーの内容をインターネット環境がない状況下で決めていかなければならないというSWY特有の状況に悩まされることも多かった。しかし、同じ委員会のPYたちに支えられ、また、講義後に参加者のPYから温かい言葉を受け取り、やりがいを感じたことで合計3回のセミナーを創り上げることができ、その経験は自分の財産となった。中でも、第3回目のセミナーでの経験が特に印象的で喜ばしいものであった。第1回、第2回のセミナーでは、セミナー中の休憩時間に参加者のPYが退室してしまうことがあった。しかし第3回のセミナーでは、満足度の高いセミナーを企画することができ、休憩時間さえもほぼ全員の参加者がディスカッションを続けていた。このように、合計3回のセミナーを通して、セミナー内容を改善していくことができたことに喜びを感じた。

All-PY セミナー委員からのコメント：（メキシコ）

この委員会では合計3回のセミナーをそれぞれ、リーダーシップ、異文化理解、社会問題の解決と振り返りという三つのテーマで企画した。最初の二つのテーマはすでに決まっていたので、私たち OPY の最初の仕事は三つ目のテーマを決めることだった。テーマを決めてからは、セミナーの具体的な内容や各メンバーの役割を決めるといふ、それぞれがテーマに対して多様なアイデア、意見、視点を持ち合わせているからこそ一番重要とも言えるステップを踏んだ。最初はそれぞれの価値観を理解することが難しく苦労したが、最後にはこの苦労した価値が分かった。個々の違いを問題点として捉えるのではなく、今まで出会えなかった文化をもっと深く理解できる機会として捉えることで、他の参加青年に異文化が混ざり合うこのプログラムの環境の利点を示すことができたと思う。三つ目のセミナーは自由にテーマを決められたため、どのテーマを取り上げるべきか委員会内で話し合った。その結果、一つ目と二つ目のセミナーの内容を

ある程度取り入れ、これまでに話してきた社会問題に対する解決策を考えていく必要があると思った。

1回目のセミナーから改善点を得たため、私たちのセミナーを準備する方法は毎回変わっていった。それにより私たちは参加青年へクリアで興味深い情報を提供できた。

セミナーは参加青年にとってだけでなく、委員会の私たちにとっても重要だったと感じる。なぜなら、セミナーを準備する際は発表の練習を繰り返し行う必要があったからだ。また、セミナーでカバーした内容は日常生活に取り入れることができたため、参加青年はセミナーの内容への理解を深めたのではないかな。

このセミナーを通して得た理解の中には、今まで気付きもしなかったことが含まれているのではないかなと思う。

アドバタイズメント委員からのコメント：（エジプト）

最初のAll-PYセミナーからは様々な背景を持つ参加青年がリーダーシップについて同じイメージを持つきっかけとなった。セミナー中の最初のアクティビティでは、10名単位で小グループに分かれ、リーダーについて各々が知っている物語を幅広い視点から話した。このアクティビティはリーダーシップという欠くことのできないトピックについて話す場を提供した。二つ目のアクティビティではコミュニケーション・スタイルについてのパーソナリティ・テスト（性格診断）が実施され、個々の強みや弱みを知ることで自身についてより理解できるきっかけとなった。

オリンピック・パラリンピックセミナー

2020年の東京オリンピック・パラリンピックを目前に控えた今年度の「世界青年の船」事業では、各国のオリンピックアン、パラリンピアンの話や開催経験国の話などを通して国際大会の意義について学び合った。このオリンピック・パラリンピックセミナーは船上研修中3回開催された。最初の2回のセミナーはオリンピック・パラリンピックセミナー委員によって企画・運営がなされ、3回目は3人のNLが企画と運営を行った。

オリンピック・パラリンピックセミナー委員からのコメント：（日本） リンピック・パラリンピックセミナー委員会では、

一つのものをゼロから作り上げる大変さと、その尊さを学んだ。

11 か国から集まった参加者は当然のことながらオリンピック・パラリンピックに対する考えも違い、どのようなセミナーにするのか、まとめるのが非常に大変だった。ただその過程で得られたものは委員会メンバー全員にとってとても大きかったように感じる。例えば参加国

二つ目のセミナーの異文化理解では参加国やそれ以外の国でのコミュニケーションの違いを明確に説明していた。参加青年は航海中に得た経験から互いの違いを広い心と考え方で受け入れることができた。船上だけでなく日常生活で参加青年が経験したカルチャーショックやその対処方法についての疑問はみんなが高い関心を示した問題だった。

三つ目のセミナーは与えられた質問に答え、将来日記を書くというアクティビティから始まった。二つ目のアクティビティではいくつかの社会問題をテーマに小グループに分かれて自国の事例について話し、どのようにこの問題を解決できるかについて考えた。そして最後に他のグループに話し合った成果を発表した。このアクティビティを通して私たちは決して一人ではなく、同じ問題を一緒に解決していくのだと感じることができた。それだけでなく、グローバリゼーションにより複数の国に影響を及ぼす世界規模の問題を考えるグローバルな視点を得ることもできた。

3回のセッションを通して、内容とアクティビティの充実、チームの絆や楽しく学ぶ環境を提供してくれたAll-PYセミナー委員には感動した。参加青年全員が覚えている下記にある一文は私たちに変化をもたらす強さを与えてくれたように感じる。

「世界に変化をもたらすことができる人は、自分なら変化を起こせると信じられるクレイジーな人だ」

であるバーレーンやスリランカは国土の大きさから今後でもオリンピック・パラリンピックを開催することは難しい。その国の参加者から出る意見は僕ら日本人とは当然のことながら違う。違いを知り、オリンピック・パラリンピックに対する考えを深めるという意味ではとても有意義な時間だった。

二つのセミナーを企画したが、その二つともに共通してオリンピック・パラリンピックが持つポジティブな効果だけでなく、ネガティブな面も参加者に考えさせるという目的をもって実施した。結果としては大成功だったように思う。11 か国から集まった200名を超える参加者がオリンピック・パラリンピックについて意見交換する様は見えてとても興味深かった。日本人だけでは出ないような意見も多く、多様性のすばらしさを感じた瞬間でもあった。

この委員会活動に多くの時間を費やしたが、とても価値のある時間だったように思う。この場を借りて、セミナー成功のために全力を尽くした委員会メンバーに感謝の意を示したい。ありがとうございました。

オリンピック・パラリンピックセミナー委員からのコメント：（ペルー）

オリンピック・パラリンピックセミナー委員会は、各参加国の青年同士が知識やアイデアを共有し、お互いから学び合える環境として最適な空間だった。委員会として、豊富な情報と参加者同士の相互交流の機会に富んだ2回のセミナーを実施した。1回目は「世界のオリンピック & パラリンピアン」をテーマに、委員会のメンバーが誇りに思うオリンピック選手及びパラリンピック選手を紹介した。紹介された選手には、エリウド・キプチョゲ、テディ・リネール、ルース・ジェベト、ソフィー・パスコー、ファトマ・オマー、クロドアウド・シルバなどが含まれ、参加青年は、アスリートが人々に感動を与え、また国や文化をつなぐ懸け橋となりうることなど、スポーツの可能性について学ぶことができた。

また、本セミナーでは、1984年に開催されたロサンゼルスオリンピックのメダリストであり、私の父親でもあるフランシスコ・ボサを紹介する機会にも恵まれた。当時、ペルーではオリンピックにおける功績が乏しかったことから、国民的英雄となった彼からの教訓は、どのような困難な場面においてもあきらめてはいけないということであり、私はこの姿勢をほかの参加青年にも共有した。

2回目のセミナーでは、近現代のオリンピック・パラリンピックの歴史を、「世界青年の船」事業が開始した年から振り返り、1988年のソウル大会から2020年の東京大会までを追った。単に大会の歴史を追うだけでなく、オリンピック・パラリンピックの可能性と課題の両側面を分析し、大会が国と国をつなぐ役割を果たすか否かをディスカッションした。

お互いの違いを受入れ、障害があることは必ずしも無力ではないことを理解することによって、職業やバックグラウンドの違いにかかわらず共通の目標を目指すことができ、オリンピック・パラリンピック大会の価値を広め、常に互いを支えることができたことは、私たちが得られた最大の教訓であり、自分が暮らすコミュニティや社会において広げていきたい学びとなった。

アドバタイズメント委員からのコメント：（日本）

1回目は主に二つのプログラムで構成されていた。最初にレター・グループ対抗のクイズ大会が行われ、オリンピックとパラリンピックの歴史と目的・大会期間中に排出された食品ごみの量の多さなどといった「ネガティブな面」についても学んだ。普段取り上げられることが少ないトピックであったため「オリンピック大会は良い面ばかりに目を向けられることが多いが、ネガティブな面が存在することを忘れてはいけない」という気付きを得ることができた。2回目のセミナーでは1988年に行われたソウルオリンピックから2020年開催予定の東京オリンピックまで大会ごとの説明があった。そのほかに「オリンピック・パラリンピックはインクルーシブであると言えるか」や「大会が行われることで国を一つにすることができるのか」といった話題について参加青年同士でディスカッションする時間も設けられた。過去に開催国となった地域の参加青年から直接、当時の様子や大会に対する意見などを聞くことができ、実際の大会の様子を想像することができた。2回のセミナーを通してオリンピック・パラリンピック大会に対する知識を増やすとともに、東京オリンピックへの期待も高まった。

Peer-Learning セミナー（PL セミナー）

PL セミナーは参加青年が主催し、PL セミナー委員が運営をサポートし行われるセミナー。委員会が参加青年よりセミナーを募り、開催要件として下記六つの条件のうち四つを満たしていることとセミナー所要時間が70分もしくは140分であることとした。条件は次の通り：1) 「社会貢献につながる取組」であること、2) 各国に広げる価値のある活動であること、3) 船上研修に活か

せるスキルの共有と習得ができること、4) 異文化理解を促進させ、視野を広げられる情報であること、5) リーダーシップを習得できる内容であること、6) 学術的な学びのある内容であること。

四日間の日程で計8コマのスケジュールが組み込まれていた。複数のセミナーが同時に開催可能なため、合計33個のセミナーを開催した。

主催者 (デリゲーション)	セミナー名	概要
(日本)	気候変動の真実 変わらなければならぬのか	環境保護の必要性の提示、身近なかかわり方の提案
(日本)	ディスカッションでキャリアを多彩にしよう	現代のキャリアの多様性を女性の視点で扱い、働き方に関して議論

主催者 (デリゲーション)	セミナー名	概要
(日本)	表面化する沖縄問題	沖縄の文化紹介と米軍基地問題の現状について
(日本)	平和教育を考える①	平和の概念共有と各国の平和教育に関して レクチャーと共有
(日本)	価値ある情報とは	日本のメディア業界の現状とジャーナリズムと 政治の関係について
(日本)	若者ための持続可能な世界を～船 での SDGs を体感しよう	SDGs についての自分たちの生活の中での 実践的なワークショップ
(日本)	国境なき音楽	音楽の力を体感するためのワークショップ
(日本)	ジェンダーについて	ジェンダーに関する課題と解決方法についての 議論
(日本)	発展途上国に対して何ができるか ～今日から行動しよう～	途上国ボランティア体験の共有
(日本)	CSR とは何か	企業の社会的責任について具体例の紹介と 「世界青年の船」事業から考える CSR に関 して
(日本)	平和教育を考える②	日本の平和教育における新しい取組、歴史教 育に焦点を当てた平和を実現するための議論
(日本)	I share	一人あたり 10 分で人生の価値観を共有して、 自らの人生を豊かにするワークショップ
(日本)	貧困解決手段の感じ方の違い	日本の貧困状況についてのレクチャー
(日本)	日本の性教育	性教育についてのワークショップ
(ブラジル)	ブラジルの対外政策と多国間の関 係性	ブラジルの外交政策の変遷に関してのプレゼ ンテーション・質疑応答
(バーレーン)	応急処置と緊急救命	AED の必要性和クイズ、その使用方法のデ モンストレーション
(バーレーン)	イスラム絵画	イスラミックアートがなぜ今の形になったの か、その変遷
(バーレーン)	イスラムとは	基礎的なイスラム教のレクチャー
(エジプト)	社会における障がい者視点の建物	障がいのある人々への社会進出を活性化す るための各国の取組の共有とディスカッション
(エジプト)	対話をしよう	アクティブリスニングの度合い・深度について
(エジプト)	アイデア市場の門をたたこう	スタートアップ事業の始め方について

主催者 (デリゲーション)	セミナー名	概要
(フランス) (日本)	さあ起業しよう	それぞれのアイデアを事業化するための実践講座
(英国)	アイデンティティとは	移民としてのバックグラウンドの価値観共有
(英国)	ペースの早い現代においての目標達成の美学	目標設定の方法論とワークショップ(グループで共通目標に向けて動く際の協働方法)
(英国)	パブリックスピーキングのヒントと仕組み	パブリックスピーキング上達のために必要な心得・スキルを学ぶ
(ケニア)	アフリカ内での貿易開発	アフリカにおける貿易の現状と今後の発展可能性についてレクチャー
(メキシコ)	障壁のないコミュニケーション	ペアに分かれて手話の実践、手話の意味を学ぶ
(メキシコ)	男性らしさ・女性らしさ	フェミニズム・マスキュリニティについての講義
(メキシコ)	活動的市民～我々の共同体～	活動的市民になるために自分自身を理解するワークショップ
(ニュージーランド)	太平洋への関わりとリーダーシップ	リーダーシップについてのワークショップ
(ペルー)	Shipibo-Konibo ペルーのアマゾンにおける先住民の知恵	ペルーのアマゾンに住む先住民の知恵について
(ペルー)	ラテンアメリカのフェミニズム活動	ペルーにおけるフェミニズム(男女同権主義)に関して
(ペルー)	植民地化のプロセスと今日のペルー文化への移民の影響	ペルーの植民地化の歴史と文化から見る植民地化の影響について
(スリランカ)	先住民の実践医療	スリランカの伝統医療のアーユルヴェーダの歴史と現代の療法について

PLセミナー委員からのコメント：(日本)

私はPLセミナー委員会を運営してみて、仕事への考え方の違いを学んだ。四日間のうち、一、二日目は日本参加青年がメインにセミナー運営を行い、三、四日目のセミナー運営は、日本参加青年一人がサポートに入る形で、外国参加青年をメインに機材調達や会場設営を行った。一概には言えないが、日本の参加青年は最後まで完成度を高めようとするあまり一部分に意識を集中させすぎる傾向にあり、逆に外国参加青年は全体を見ながら目的を達成する傾向だったことを感じた。あるセミナーが直前でキャンセルになった際の出来事が印象的だ。キャンセルされたセミナーには事前に参加希望者が30名ほどいた。日本参加青年はすぐさま他のセミナーに参加予定

者を振り分ける為に、別のセミナーの企画者にセミナーのキャパシティを確認するという案、外国参加青年の多くは他のセミナーに影響を出さないように参加予定者には自主活動を促すという案があった。これは日本人だけで議論していたら出会えなかった案なのではないかと感じた。それぞれの違いを認め合い、お互いを補完するという感覚を通して今後の日本が世界とどのように協力していくのかを個人レベルで考えた委員会の活動となった。

アドバタイズメント委員からのコメント：(日本)

日本参加青年が主催した「平和教育を考える」セミナーに参加した。このセミナーを通じて主に平和に対する考

え方について各国青年から学んだ。その中でもバーレーン代表参加青年たちが述べていた平和への認識が印象的だった。

2001年にアメリカのニューヨークで起きた同時多発テロ以降、欧米諸国の世論が「反アラブ人」になってしまい、イスラム教の平和が脅かされたと述べていた。このようなアラブ諸国から見た9.11後の平和認識の変化は特に学びになった。

一方で、平和と聞くと日本参加青年たちは太平洋戦争末期の長崎、広島に落とされた原爆や2011年に起きた東日本大震災などの自然災害を挙げていた。その中で、

中学校の教員をしている日本参加青年から学校教育の中での平和教育の話を聞いて、平和教育の地域格差があることを感じた。彼は生徒に平和への見識を広げるために原爆で被害を受けた方との意見交換を授業の中で毎年行っていると述べた。しかし、私が受けた平和教育は机の上の学びだけであった。このことから、各地域の平和教育の質、学び方の違いを知ることができた。

このように、平和という一つの言葉を多面的な角度から考えることの大切さや、国、宗教、地域などによって認識が異なることをこのセミナーを通じて学ぶことができた。

クラブ活動

参加青年が主催者となり、各国の文化にまつわる自分の特技（ダンス、歌、伝統芸能など）を他の参加青年に教える活動。参加青年は最大二つのクラブ活動に参加し、それぞれ3セッションを通して他国の文化を学んだ。2月14日に実施されたクラブの成果を発表するエキシビ

ションでは、3セッションの成果を発表する場としてほとんどのクラブがステージに立った。

日々のクラブ活動及びエキシビションは全てクラブ活動委員会により運営された。

主催者 (デリゲーション)	クラブ名	内容
(日本)	武道クラブ	剣道と柔道の二つの武道を実施した。剣道では、基本となる礼儀作法・足さばき・竹刀を利用した素振り・打ち込みを行った。柔道とは、空手に器械体操の要素を組み込んだ三次元の攻防を展開する武道。柔道の五つ基本動作、旋（体を回転させる動き）・運（体を上下に動かす動き）・変（体を倒す動き）・捻（体をひねる動き）・転（器械体操の動き）を体得できるよう努めた。
(日本)	よさこいクラブ	よさこいの歴史を紐解きつつ、実際によさこいを踊ることでその楽しさ、ダイナミックさ、そしてよさこいに秘められた可能性を体感した。よさこいは伝統と現代の新しさが融合した踊りであるため、伝統的な部分を感じてもらうために「鳴子」を用いて練習を行うと同時に SWY Yosakoi Project メンバーで制作したオリジナルよさこい“Tomoshibi”を躍った。
(日本)	沖縄音楽クラブ	沖縄の楽器（三線と琉球箏）の演奏を体験した。沖縄音楽の歴史や楽器の伝来についても学んだ。沖縄音楽にはどのような歴史があり、現在まで伝承されているのかを理解した上で、三線、琉球箏、うたのパートに分かれて沖縄民謡の「安里屋ユンタ」を楽しく合奏することができた。
(日本)	日本文化クラブ	日本語と書道を同時に学べるクラブ。自己紹介や基本的な挨拶だけでなく、クラブに参加していた参加青年がどのような日本語を学びたいかアンケートを取り、クラブ活動に取り入れた。書道クラブでは書道を通して外国参加青年に漢字に親しんでもらった。名前の当て字を作ったり、歌詞を半紙に書き、エキシビションで発表したりした。
(バーレーン)	iBahrain 101	iBahrain101 はバーレーンの文化に触れるクラブ。参加青年は、バーレーンアクセントのアラビア語、伝統衣装や独特の表現を知った。このクラブ活動の最後にはバーレーンの有名な歌を参加者が歌えるようになった。

主催者 (デリゲーション)	クラブ名	内容
(ブラジル)	カポエイラ、 踊りとリズム	カポエイラは踊り、武術、音楽、リズム、歌などが融合した伝統的な文化。クラブ活動を通してカポエイラの基本動作や歌を習得することができた。ブラジルの歴史と深く関係する文化を参加者と共有した。
(ブラジル)	アートを通して学ぶ ポルトガル語	ブラジルのポルトガル語を音楽、文学、口語など様々な角度から学んだ。ブラジルでは当たり前に使われている表現を知り、ブラジルについての理解を深めた。
(エジプト)	ヌビアン・ダンス	参加青年はヌビアの踊りを体得することでエジプトの歴史や文化について学びを深めた。
(エジプト)	タウラ・クラブ	エジプトのタウラ・ゲームという伝統的なボードゲーム2種類を学んだ。
(フランス)	フレンチ・ファッション 入門	参加青年はフランスの編み物の基本を学んだ。またクラブ活動と併せてSWY ファッションショーを開催し、個性豊かなファッションをお互いに披露した。
(フランス)	自宅で作れるフランス 料理とフランス・コスメ	料理と美容で有名なフランスならではの活動として参加青年に調理が不要なフランス料理の紹介と自然の素材を使ったコスメの作成を行った。
(英国)	コミュニティ・クワイア	コミュニティ・クワイア・クラブでは参加者たちが自国の歌を学び合った。歌を通してストレスをコントロールしたり、互いに励まし合ったりと歌の力を感じることができた。
(ケニア)	ケニア文化クラブ	ビーズを使って伝統的なブレスレットやネックレスを作成した。また、ギリアマ民族の伝統的な踊りも学んだ。
(メキシコ)	カルトネリア	カルトネリアはメキシコの伝統的な手工芸品。死者の日などの祝典やピニャータ(中にお菓子などを詰めた紙製のくす玉人形)など用途は多様。このクラブを通して参加青年はカルトネリアの歴史を学び、実際にカルトネリアを製作し、メキシコの文化に触れた。
(ニュージーランド)	NZ カバ・ハカ・ クラブ	ニュージーランドの有名なハカとアオテアロア(ニュージーランド)の先住民族であるマオリについて学んだ。参加青年は普段見るハカだけでなく、基本的なマオリ語とマオリ語の歌を学び、マオリの文化や考え方に触れた。
(ペルー)	カホンとサパテオ	カホンは16世紀にアフリカ人がペルーに連れてこられた際に自分たちの文化を継承するために作られた楽器。サパテオ(ペルーのタップダンス)もアフリカ系ペルー人が自分たちのエネルギーやパッションを表現するために作り上げた踊りである。このクラブ活動を通して、参加青年はペルーの伝統的な音楽をカホンとサパテオで体得した。
(ペルー)	ツスイ・クスイ・ダンス: ケチュア語の歌とペルーの踊りを学ぶ	ケチュアはペルーの伝統的な言葉。「ツスイ・クスイ」はケチュア語で「一緒に踊ろう!」という意味。参加青年たちはケチュア語の歌で伝統的な踊りを体得した。
(スリランカ)	スリランカ・ダンス	参加青年たちはスリランカ各地の伝統的な踊り、衣装、イベントなどについて学んだ。また、スリランカの伝統的な太鼓にも触れ、スリランカの文化について深く知ることができた。
(スリランカ)	スリランカの伝統的な 瞑想とマインドフルネス	スリランカの瞑想を通して参加者たちはマインドフルネスについて学び、集中して自身に向き合うことができた。また、瞑想するだけでなく、体をストレッチすることで自分自身と対話する機会を得た。

クラブ活動委員からのコメント：（日本）

クラブ活動委員の委員長としての経験は挑戦や新しい知識との出会い、ワクワクした思い出でいっぱいだ。

最初は外国参加青年とのコミュニケーションは言語の壁もあり難しい瞬間もあった。しかし、これは日本参加青年だけでなく英語を母語としない外国参加青年も自分の考えを表現することに苦労している場面があることを知るきっかけにもなった。母語で話すことの重要性を知った私は、時には最初に日本語で日本参加青年だけに伝え、その次に英語で日本語話者以外の青年に伝えるという方法を取り、自分が伝えたいことに齟齬がないよう努めた。

一度委員会としてのチームビルディングができるとその後の役割分担はとてもスムーズだった。自分に任せられたタスクが終わると他の委員会メンバーを手伝う人もいた。これにより、私自身あまり気負わず与えられた時間内にタスクを完了することができた。これも全てチームワークの賜物だと感じている。

特定の委員会のメンバーからは指示を出すことの難しさやタスクを人に振ることの難しさを学ばせてもらった。最初は難しく感じていたが、最後にはチームワークのおかげで上記の困難も乗り越えることができた。ほとんどの委員会メンバーにとって委員会は安心して何でも

話せる場となり、船上生活から起こるストレスについても共有することができた。委員長としてこのような恵まれた環境に関われたことをとても誇りに思う。

アドバタイズメント委員からのコメント：（日本）

クラブ活動ではそれぞれが興味・関心のあるクラブ活動に参加し、代々受け継がれてきた伝統的な踊りや歌、言語を学んだ。ニュージーランドのクラブ活動では、ハカの踊りやホンギというマオリ式の鼻と鼻を触れ合わせる挨拶、自己紹介の仕方が教えられた。特に、自分の出身地を伝える際に近くの山や川の名前を相手に伝えることには驚いた。自分の住んでいる地方名を伝えることが通常である私にとって、マオリの挨拶は人間が自然との共生で成り立っていることを感じさせられるすてきな空間であった。そのほか、アラビア語や日本語などのクラスも開設され、日常で使用されるフレーズを使用したロールプレイングや歌を歌い、新しい言語への学びを深められた。自文化の誇りを紹介するだけではなく、異文化も実際に体験できたことで、各国の多様性をより一層感じられた。国が違えば言葉も挨拶も、相手への接し方も異なる。11 か国からの青年が集まった船という限られた空間では、私たち参加青年がその文化を代表する存在なのだと改めて認識することができた。

スポーツ&レクリエーション

船上で開催された2回のスポーツ&レクリエーションでは、レター・グループ対抗で様々なゲームが行われた。船内という限られた場所を使ったゲームは全てイベント委員会により考案及び運営され、そのクリエイティブなゲームの数々に参加青年は大いに楽しんだ。

イベント委員からのコメント：（フランス）

このレポートではイベント委員により企画及び運営された2回のスポーツ&レクリエーションについて記す。

何よりもまず記すべきはこの委員会における発言の自由である。最初の委員会はまずブレインストームから始まった。その結果、私たちは2回のスポーツ&レクリエーションには十分と言ってもよいほどのアイデアを出すことができた。

その後、これらのアイデアから実際に行う競技を選定する方法を話し合った。全員が納得できる選定方法を決めることはとても難しかったが、投票したり、意見を出し合ったりすることで競技を選ぶことができた。また、必要な広さや物品も考慮した上で競技を実施する場所も決めることができた。場所を決めた後は、天候の影響を最小限に抑えるために室外であるスポーツ・デッキは避け、室内へ計画を変更した。

スポーツ&レクリエーションを通しての1番の挑戦は

ルールの徹底だった。レター・グループ間で生じる闘争心がときにルールを破ることにもつながってしまった。しかし、委員会のメンバーで協力し、ルールを徹底し、責任を持ち、順番に審判を行った。

2回目のスポーツ&レクリエーションは1回目よりも超えなければいけない壁が高かった。まず、悪天候だったことと、マスク着用が義務付けられたことにより予定していた二つのゲームをキャンセルしなければいけなかったことだ。委員会として一時はセッションを中止することまで考えたが、別のゲームを取り入れたことでなんとか2回目も実施することができた。

私たちイベント委員会は協力とコミュニケーションの結果、2回のセッションを成功させることができた。自分たちは参加することは叶わなかったが、互いに助け合い楽しく過ごすことができた。

アドバタイズメント委員からのコメント：（日本）

1回目のスポーツ&レクリエーションでは、トレジャーハント、雑巾絞りリレー、綱引き、椅子取りゲームの4種目が行われた。綱引き、雑巾絞りリレーは、チーム全体で勝利するための作戦を共有し、チーム一丸となって取り組むことができた。トレジャーハント、椅子取りゲームは、ルールが曖昧な部分や危険なプレーが見られ、全

員が気持ちよくプレーするためにルールの工夫や青年への事前の注意が必要であると感じた。

2回目は、侍ジャンケン、エルボーバレー、ハンドフリーボールが行われた。1回目の反省をもとに、イベント委員による正確な審判のもと種目が行われ、また怪我のリスクを低くするため、使用できる体の箇所や動きに制限をかけた種目が行われた。エルボーバレー、ハンドフリーボールは、互いにどのように連携するべきかをレター・グループ内で共有しながら取り組んだ。侍ジャン

ケン、チーム間の連携は必要なかったが、一人一人に対してチームから励ましの声かけがあり、気持ちよくプレーすることができた。

二日間を通して、勝利という共通の目標があったので、いつも以上に団結力を感じることができた。また、セミナーやディスカッションとは違い、簡単な単語、表情、体の触れ合いなどによるコミュニケーションが多く、普段は英語での会話が苦手な参加青年も簡単にコミュニケーションを取ることができた。

自主活動

自主活動の時間や休憩時間などの自由時間を利用して、参加青年の自発的なアイデアによる様々な活動が行われた。共通の興味や関心を持つ参加青年が一緒にな

り企画・運営しているものも多数あった。企画・運営のすべてが参加青年たちによって行われ、それらの活動を通して参加青年間相互の理解と親交を深めた。

事後活動セッション

PY サポーター 4 名がナショナル・リーダーやファシリテーターの協力を得ながら企画・運営を行い、事後活動について参加青年に紹介した。全部で3回のセッションで構成された事後活動セッションを通して事後活動について主体的に考え、自国に戻った後にそれぞれがしたい活動について考えるきっかけとなった。

アドバタイズメント委員からのコメント：（日本）

1月26日の初回のセッションでは、事後活動組織である IYEO（日本青年国際交流機構）や各国の同窓会組織に関する説明と、過去に参加青年として「世界青年の船」事業や「東南アジア青年の船」事業に参加した経験のあるナショナル・リーダーやサブ・ナショナル・リーダー、ファシリテーターが実際に行っている事後活動に関する話を聞いた。

2回目の2月10日には、各デリゲーションに別の国のナショナル・リーダーがファシリテーターとして参加

する形で本事業での学びを今後どのようにいかしていくのかについて話し合った。日本参加青年は九つのグループに分かれ、乗船以降の自身の変化や今後の具体的なプランを共有した。

2月13日に行われた最終回では、教育や環境問題など各テーマに分かれて話し合った。そのテーマに関心がある理由や、それをめぐる各国の現状、下船後の行動プランを中心に議論し、テーマごとに1枚のポスターにまとめた。

セッションを通してどのような事後活動をしているかを知ることによって、本事業を終えたあとどのような活動ができるかのイメージを持つことができたと同時に、参加青年同士の日々の会話の中でも各々の今後のビジョン等将来に向けた前向きな声を聞くことができた。本事業で得た経験、知見、そしてかけがえのない仲間を財産に、誰もがそれぞれのフィールドでより良い世界の実現のため活躍されることと思う。

フェアウェル・セレモニー&ディナー

2月15日、船上研修最後となるイベントであるフェアウェル・セレモニー&ディナーがイベント委員会の企画・運営の下行われた。参加青年たちは出会ってから約1か月の間、共に過ごした思い出を振り返り、それぞれが培った友情を再確認する場となった。

アドバタイズメント委員からのコメント：（日本）

フェアウェル・セレモニーは、まず「グレイテスト・ショーマン」から始まり、管理部への感謝、SWYでの振り返りを経て、SWY Song を歌い、フィナーレとなっ

た。グレイテスト・ショーマンでは様々な参加青年が各国の民族衣装を着て登場し、この船の多様性を表した様な内容であった。最後の SWY Song では参加国それぞれの言葉が歌詞に入っており、SWY ならではの趣あるものとなっていた。セレモニー後には多くの参加青年がドルフィンホールに残り、声が枯れるほど歌い、踊ることに夢中になった者も多かった。また、手紙を貰い、音楽が鳴り響く中、限られた時間をさらに仲を深めるために使う者もいた。誰しもがずっとこの時間が続くことを願っていただろう。それまで、フェアウェル・セレモニー

は遠い先のことで実感が湧くことはなかった。しかし、非日常が日常に変わった今、終わりを迎えつつある。初めて会った1月12日から、このメンバーで太平洋を渡り、メキシコに向かった。そして、再度、日本に着こうとしている。このような「終わってしまう」という自覚が芽生えたのがこのセレモニーだった。これまで撮った写真を見返すと、互いの関係が変わったと思える。それまで

は「共に船に乗る人」だったのが、今では「共に船に乗った仲間」に変わったことが分かる。大好きな写真が多すぎてスマートフォンの容量が足りなくなかった。今までの感謝を伝えたい人が多すぎて話す時間が少ないと感じた者もいるかもしれない。この旅は終わってしまうかもしれないけれど、また新しい旅をこれから皆で始めよう、そう思えるイベントであった。

寄港地活動

寄港地活動のねらい

航海中、下記を目的にメキシコのエンセナーダで寄港地活動を行った。

- 表敬訪問やレセプションなどの公式行事を通して、国際儀礼（プロトコル）を身に付ける。

- 各種施設を訪問し、その地域における文化や歴史、社会情勢について学びを深める。
- 大学における現地青年とのディスカッションを通じ、国際理解を深め、国際親善を図る。

エンセナーダ

令和2年1月30日から2月1日にメキシコのエンセナーダにて寄港地活動を実施した。寄港地活動中は既参加青年を中心とする約50名の現地ボランティアが三日間の活動を企画し、各訪問先での活動をリードした。約

20年ぶりの寄港となったため、苦労した部分もあったようだったが、メキシコ全土だけでなく他国からも既参加青年が応援に駆け付け、プログラムが実施された。

1日目	場所	活動内容
8:00	エンセナーダ港	入港
9:00	にっぽん丸	入国手続き
9:20	にっぽん丸・ドルフィンホール	政府職員、SWYAA 及びボランティアスタッフによる寄港地活動についてのオリエンテーションが実施された。
10:00	エンセナーダ港	歓迎イベントがエンセナーダ港で行われ、参加青年は地元の青年やエンセナーダ市の職員から温かい歓迎を受けた。管理官及びナショナル・リーダーは市の職員とギフト交換を行った。また、日本参加青年はソーラン節を披露し、地元の人たちからは伝統的なダンスやマリアッチの音楽を披露された。
12:30	リビエラ文化センター	1930年に建てられた歴史のあるリビエラ文化センターで昼食が提供された。参加青年はこの歴史的な建造物を見学し、メキシコの伝統的な料理を楽しんだ。
15:30	課題別視察	二つのグループに分かれて課題別視察
	カラコール科学博物館	科学博物館を訪問し、パハ・カリフォルニア州の自然や環境について学んだ。参加青年は博物館のツアーや海洋保護に関するディスカッションに参加した。
	メキシコ国立自治大学	大学内のナノサイエンス・ナノテクノロジー・センターを訪問し、生徒と交流した。研究施設内の見学ツアーが実施された。
17:30	にっぽん丸	帰船、夜のレセプション・ディナーに備えて準備した。
19:00	にっぽん丸・ダイニング瑞穂	レセプション・ディナーを開催し、色とりどりの民族衣装を着た参加青年が寄港地活動に協力してくれた関係者らを歓迎した。Pedro Arath Ochoa Palacio パハ・カリフォルニア州文化庁長官の挨拶のあと日本参加青年が和太鼓と日本舞踊を披露した。

2 日目	場所	活動内容
10:30	ティファナの海岸沿い	バハ・カリフォルニア州ティファナ市の国境沿いの地区を訪問した。参加青年はアメリカとメキシコの国境を見学した。
11:30	ティファナハイパフォーマンセンター	国際基準を公式に満たしているハイパフォーマンセンターを訪問した。参加青年はセンターに在籍するアスリートからいくつかの動作などを学んだ。
14:00	ティファナ文化センター	ティファナ文化センターにてシーザーサラダを堪能した。シーザーサラダは 1900 年代にティファナで生まれた。参加青年はシーザーサラダというすでに馴染みのある食べ物を通してメキシコの歴史や文化を学んだ。
15:30	ティファナ文化センター	自由時間。文化センター近くのショッピングセンターやスーパーマーケットなどを散策した。
19:00	にっぽん丸	帰船、夕食
3 日目	場所	活動内容
10:00	ぶどうの木とワインの博物館	ワイン博物館を訪問し、小グループで地元スタッフによる館内ツアーに参加した。その後、参加青年は二つのグループに分かれた。一つのグループはこの地域の歴史について聞き、もう一つのグループはワカモレの調理方法を学んだ。その後、メキシコ料理がふるまわれ、フェアウェル・セレモニーが行われた。
16:00	エンセナーダ市内	自由時間
18:00	にっぽん丸	帰船
20:00	エンセナーダ港	出航

アドバタイズメント委員からのコメント：（日本）

船で揺られること 16 日目、ついに待ちに待った目的地メキシコ合衆国・エンセナーダへ到着した。三日間天候に恵まれ、美しい景色とともに、各々が徐々に自分の足で平らな土地を歩く喜びをかみしめていた。日本とは異なるラテンアメリカ特有ののんびりとした時間の流れ、せかせかしなくてもなんとなくさという人々の緩やかなマインドセット、そして事あるごとに、メキシコの土地を去る最後の瞬間まで口ずさんだ、耳に残るあの曲。言葉にしようと思っけないが、確実にそれぞれの中に焼き付いたメキシコでの名場面があるはずだ。個人的には、1 日のプログラムを終え、帰るときに見えた、夕日に染まるにっぽん丸と、デッキで夜風にさらされながら見た、エンセナーダの家々の夜景を私は一生忘れないと思う。

一日目、盛大な歓迎イベントの後、文化センターへ移動し、昼食を取った。その際も会場は音楽に溢れ、華やかな雰囲気だった。その後、メキシコ国立自治大学とカラコール科学博物館とに分かれて見学し、にっぽん丸でゲストを招いたレセプションが行われた。

二日目、バスで 2 時間かけてティファナにあるアメリカとメキシコの国境沿いの都市へ向かった。それぞれ思うことがあったこの視察をきっかけに、多くのディスカッションが参加者のなかで起き、個人的にはこの寄港地活動後、「SWY」を感じる場面が多かったように振り返られる。その後ハイパフォーマンセンターで現地のユースと交流、短いモール散策も行った。

三日目、寄港地活動最終日、ワイン博物館へ向かった。広大な土地に広がるぶどう畑と山々を目にし、実際に木々に実や葉が茂っていたら、さぞ美しいだろうと想像した。オリーブ畑を訪れることは叶わなかったが、ワイン・チョコレートの歴史の説明を受けた。その後、最後に突然舞い込んだ自由時間を各々が楽しんだ。エンセナーダの夜景が綺麗に見え始める頃、にっぽん丸はメキシコから出港した。寄港地活動をサポートしてくれた現地の既参加青年やボランティアスタッフに見送られ、いつまでも手を振る姿、グラシアス！と叫ぶ声、そして最後までみんなで歌ったあの曲が印象的だった。またメキシコをいつか訪れてみたい。

陸上研修 2

2月18日の午前中に晴海客船ターミナルに着岸し、オリンピック・パラリンピック競技会場視察を行った後、国立オリンピック記念青少年総合センターに移動し、2月20日まで陸上研修2を行った。

2月18日午後、各国のナショナル・リーダー、サブ・ナショナル・リーダーと各国1名のアシスタント・ナショナル・リーダーは安倍晋三内閣総理大臣表敬を行った。

1 オリンピック・パラリンピック競技会場視察

2月18日午後に行われたオリンピック・パラリンピック競技会場視察では、お台場海浜公園と新国立競技場を訪れ、今年夏に迫る東京オリンピック・パラリンピックに向けた準備状況などを東京都オリンピック・パラリンピック準備局及び独立行政法人日本スポーツ振興センターそれぞれの担当者から伺った。また、車窓から東京アクアティクスセンターや有明体操競技場についても説明をしていただき、参加青年たちは世界的競技大会の規模の大きさなどについて理解を深めた。

アドバタイズメント委員からのコメント：（ニュージールランド）

2020年2月18日、天気恵まれた中、「世界青年の船」事業の参加青年たちは2020年の東京オリンピック・パラリンピック（東京2020）の会場を視察した。東京都オリンピック・パラリンピック準備局と日本スポーツ振興センター協力の下、バスからいくつかのオリンピック会場を見学しながら、いよいよ始まる大会について学び、その開催に当たり、どのような施設が新たに建造されたのかを知った。

東京2020では11,090名のアスリート、パラリンピックには4,400名のアスリートが参加する。オリンピック関連で約60万名の外国からの訪問者が予想される。東京2020の運営やそのコーディネーションの努力は凄まじく巨大だ。二つの大会に関わるボランティアの総数はなんと約11万名！

新国立競技場、有明体操競技場、東京アクアティクスセンターなどの最先端施設は東京2020のために建造された。すべての会場は「より良い未来へ、ともに進もう。」という持続可能性に配慮した運営計画と基本理念に則り建造された。この原則に基づきこれらの建造物は資源の

管理、気候や自然環境、人権の保護なども考慮している。

多くの大規模なインフラ計画と同様に東京2020の会場建設は大きな発展をもたらした。必要材料である木材を国内で生産することで林業の発達に貢献したのではない。建造物は日本式や日本文化を具体的な形にした。自国民が誇りを持てる建造物であること、この建造物を通して海外からの訪問者に歴史や文化を紹介できるのはとても重要なことだ。また、施設の周りには緑地も確保されており、環境保護や環境問題に対する関心も示している。

東京2020で建造されたものは再利用を前提に作られている。つまり、東京2020の後、これらの建物の使用用途はすでに計画されており、建造にかかった金額や環境関係の投資を最大化させることが考えられている。建物の再利用について計画を立てることは重要なことだ。残念なことに日本やその他の国で開催された過去のオリンピックでは建物の再利用計画が全くない、あるいは少しだけある、という状態で建造されたものも多い。これはただ資源を無駄にしているというだけでなく、地域住民にとってもこれほどまでに大きな建造物が大会後は廃墟となるのはただ心が痛む出来事だ。私たちはこのようなことが起こらない取組をしている東京都オリンピック・パラリンピック準備局と日本スポーツ振興センターを称賛したい。未来のオリンピック開催地もこの足跡を辿ってくれることを期待する。

東京オリンピックは7月24日から8月9日、東京パラリンピックは8月25日から9月6日に開催される。「世界青年の船」事業の参加青年を代表し、全てのアスリートへエールを送る。選ばれた競技で自国を代表することに誇りを持ち、「日出ずる国、日本」での時間を大いに楽しんでほしい。

2 都内視察

2月19日に行われた都内視察では、レター・グループ別に分かれて、日本参加青年が外国参加青年を案内した。お互いが訪れてみたいところを聞き取りながら各レター・グループがそれぞれに合ったスケジュールを作成

した。1日を通し、外国参加青年だけでなく、日本参加青年にとっても東京や日本の文化について知る機会となった。

アドバタイズメント委員からのコメント：

(エジプト)

日本の首都、東京を歩き回るのはとても驚きに満ちた経験だった。日本の豊かな文化はたった1日では十分にすることができないことはわかっていた。体験したいものや行ってみたい場所が多すぎたが、限りある時間を最大限いかせるよう努めた。まず初めに明治神宮を訪問し、巨大な鳥居やたくさんの酒樽が備えられているその神聖で平和的な空間を視察した。私たちは日本式のお祈り方法を初めて経験し、初めておみくじを引いた。これらの体験は神道の歴史を学ぶ上でとても重要だった。

その後、都内の人にあふれた道を歩きながら、私たちは見えるもの全てについて質問をした。そして日本文化を象徴する通りを有する原宿に到着した。猫やふくろうカフェや他にもたくさんのものを見た。それからJR線と東京メトロに乗り、日本の力強さとその動的構造を感じた。

浅草に到着し、昼食としてお好み焼きという有名な日本料理を食べた。自分で具材を選んで調理をするという経験をし、でき上がったお好み焼きはとてもいい匂いがした。

浅草寺に向かうにぎやかな道ではそのにぎやかさによく合う華やかな色の浴衣を試着した。そのお寺は歴史的に神聖な場所として多くの訪問者がいた。

日本参加青年と服から食べ物、宗教まで日本の伝統と文化を共有できたことで私たち外国参加青年は日本とその豊かな歴史を理解することができた。様々な国と文化から来た私たちにとってこの1日でどれほど、ありとあらゆる物事に対する価値観を共有できたかは計り知れない。この1日は私たちに日本人として日々の暮らしを送る体験をさせてくれた気がする。この経験は私たちの中にある日本文化とのつながりを強くし、日本文化に対する温かい感情をより深くした。

3 修了式、解散交歓会

2月20日、国立オリンピック記念青少年総合センターで修了式及び解散交歓会を行った。修了式では、温かい雰囲気の中で修了証の授与が行われ、各国のNL、SNL及び各国1名のANLが代表して壇上で修了証を受け取った。その後、参加青年を代表してバーレーンのナショナル・リーダーがスピーチを行った後、

古矢一郎管理官からあいさつがあり、閉会となった。その後の解散交歓会はレストランときで行われ、英国のナショナル・リーダー及びエジプトのナショナル・リーダーによるスピーチが行われ参加青年は共に歩んだ約1か月を振り返った。

帰国後研修

2月21日及び22日の二日間は国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて日本参加青年が帰国後研修を行った。研修では、5月に実施される帰国報告会に向けた準備等を行ったほか、NL、SNL、ANLによるプログラム振り返り等を行った。また、船上でディスカッショ

ンし尽せなかった議題を取り扱い、様々なグループ単位で話し合った。

本事業で得た知識や経験などをいかす事後活動のネットワークについて日本青年国際交流機構の代表者より説明があった。

地方プログラム

陸上研修2が終了した翌日の2月21日から2月24日に外国参加青年に対して三泊四日の地方プログラムを実施した。2か国ずつ一つの受入県へ向かい、その土地ならではの施設を訪れ、全員が二泊三日のホームステイ

を経験した。2月24日に東京に戻ってきた参加青年は、東京国際空港（羽田空港）または成田国際空港からそれぞれ帰国した。

山形県（ニュージーランドとスリランカの参加青年）

月 日	時 間	活動内容
2月21日 (金)	11:00-13:44 14:30-15:30 16:00-17:00	東京駅より山形駅へ（つばさ135号） 松田明子山形県子育て推進部長を表敬訪問 最上義光歴史館見学
2月22日 (土)	10:00-11:45 14:00-16:00 18:00-20:00	和菓子作り体験 山形県緑町庭園文化学習施設「洗心庵」で地元青年とディスカッション 歓迎会及びホームステイマッチング
2月23日 (日)	終日	ホームステイ
2月24日 (月)	13:30 14:04-16:48	ホームステイ家庭より集合 山形駅より東京駅へ（つばさ144号）

受入れ実行委員代表（山形県 IYEO 会長）：

山形県では、今年度の「世界青年の船」事業地方プログラムでニュージーランド及びスリランカの青年たちを受け入れました。例年にない暖冬やコロナウイルスの影響もあり、開始直前までドタバタした日々を過ごしていましたが、雪に馴染みがないであろう青年たちに、山形の冬、豊かな自然や文化を体験してもらいたいと、実行委員一同準備に励んできました。

初日、青年たちが山形駅に到着した瞬間から、青年たちにとって、一生に一度の「世界青年の船」事業地方プログラムが始まりました。「やっしょーまかしょ、しゃんしゃんしゃん」。プログラム中、特に印象に残ってい

るのは、山形特有の「花笠締め」で結んだ歓迎会とホストファミリーマッチング。各国青年たち、ホストファミリー、そして実行委員一同、会場が一つになった瞬間でした。

表敬訪問から始まり、ホームステイから帰り、別れを惜しむ青年たちを見送るまで、実行委員一同、仕事や家庭を抱えながら、みんなで作り上げた地方プログラムでした。たくさんの笑顔や、別れの際の涙を見て、何度経験しても、思いは一緒です。受入って、つながるって何て楽しいのでしょうか！

山形県での地方プログラム開催に向け、ご協力くださったすべての皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。



静岡県（フランスとペルーの参加青年）

月 日	時 間	活動内容
2月21日 (金)	11:03-12:03 12:50-15:40 16:10-17:10	東京駅より静岡駅へ（ひかり 469 号） 久能山東照宮、日本平夢テラス、三保の松原見学 フェルケル号に乗船し清水港色彩計画について講義を受ける
2月22日 (土)	9:30-16:00 18:00-20:00	常葉大学訪問 ・ 講演：「海外メディア通訳者からみる東日本大震災」 ・ 地元青年とワークショップ：「防災をテーマに楽しくディスカッションしよう」 歓迎会及びホームステイマッチング
2月23日 (日)	終日	ホームステイ
2月24日 (月)	10:30 11:39-12:40	ホームステイ家庭より集合 静岡駅より東京駅へ（ひかり 462 号）

受入れ実行委員代表：

静岡県は 13 年ぶりに「世界青年の船」事業の地方プログラムを受け入れ、フランスとペルーの青年が来静しました。

一日目は静岡県の自然と文化を体験してもらうべく、久能山東照宮と三保の松原、清水港の見学を行いました。天候にも恵まれ、久能山の 1159 段ある階段を上り、日本平と富士山の美しい景観を楽しんでいました。また、清水港でフェルケル号に乗船し、東海大学の東恵子教授より清水港色彩計画について講話をしていただきました。二日目は、常葉大学にて静岡県が力を入れている防

災を通してお互いの理解を深めるために、東北出身の通訳者である莉々紀子氏に東日本大震災の体験を話していただき、午後は地元の青年とディスカッション交流をしました。互いの文化や価値観の違いを知る良い交流となりました。

その後歓迎会を行い、各家庭でのホームステイとなりました。最後はみんなで「パプリカ」を歌ってお別れをしました。今回の地方プログラムにあたり、様々な方のご協力があって成し遂げられたことを実感し、関わった皆さんにとって有意義な時間になったと感じました。



和歌山県（ブラジルとケニアの参加青年）

月 日	時 間	活動内容
2月21日 (金)	10:13-12:16 13:15-14:16 14:30-16:00 16:00-17:30	東京駅より新大阪駅へ（のぞみ 319 号） 新大阪駅より和歌山駅へ（JR 特急くろしお 13 号） 田中一寿和歌山県庁環境生活部部長を表敬訪問 和歌山城見学
2月22日 (土)	11:00-12:30 12:30-16:30 18:00-20:30	上富田町にて地元高校生とランチ・意見交換会・熊野古道について事前学習 熊野古道ハイキング 歓迎会及びホームステイマッチング
2月23日 (日)	終日	ホームステイ
2月24日 (月)	11:00 11:32-13:50 14:10-16:43	ホームステイ家庭より集合 紀伊田辺駅より新大阪駅へ（JR 特急くろしお 18 号） 新大阪駅より東京駅へ（のぞみ 366 号）

受入れ実行委員代表：

和歌山駅に到着し、和歌山県庁表敬を終え、その後、徒歩で和歌山城へ行き、春の陽気を感じつつ、忍者ガイドと遭遇しました。天守閣へ登り、日本の城という伝統文化を目の当たりにし、驚きの表情でした。

翌日、バスにて紀南の地へ移動。3 連休初日でしたが、高速道路の混雑はなく、スムーズに移動できました。

昼食会場へ到着し、手作り、できたてのお弁当とお味噌汁を食べ、日本の弁当スタイルに感激していました。

その後、熊野古道や本宮大社の説明を聞き、実際に、熊野古道を体感すべく、熊野古道館、滝尻王子、熊野の最終目的地である本宮大社を訪れました。生憎の天候でしたが、本宮大社を参拝するころには、雨は止んでいました。その後上富田町内に戻り、ホストファミリーとの

対面式、交歓会を行いました。青年パフォーマンスとして、ブラジルからは詩の朗読と、ケニアからは歌を披露してくれました。

翌日は終日、ホストファミリーと過ごし、旅の疲れを癒すことができました。

最終日、紀伊田辺駅に集合。全員で最後の写真を撮り、青年たちの乗るくろしお号が見えなくなるまで、涙ながらの見送りをしました。

今年は、日本でオリンピックとパラリンピックが開催されます。たくさんの国の代表が参加。ブラジルとケニアの活躍を期待し、応援します。SNS 等を活用してホストファミリーとの交流を深めていただきたいと思います。そして次回来日の際はぜひ和歌山へお越しください。



広島県（エジプトと英国の参加青年）

月 日	時 間	活動内容
2月21日 (金)	10:30-14:26 15:30-16:00 16:30-17:30 19:00-20:30	東京駅より広島駅へ（のぞみ 25 号） プログラムのオリエンテーション 田辺昌彦広島県副知事を表敬訪問 お好み焼き作り体験
2月22日 (土)	8:30- 9:30 9:30-10:30 10:30-11:30 12:30-14:30	平和公園散策 伝承者による被爆体験講話 平和記念資料館見学 歓迎会及びホームステイマッチング
2月23日 (日)	終日	ホームステイ
2月24日 (月)	8:30 9:07-13:02	ホームステイ家庭より集合 広島駅より東京駅へ（のぞみ 152 号）

受入れ実行委員代表：

私には一つの思いがあります。それは「『広島』を知ってもらいたい」という思いです。それは、決して悲しい歴史を背負った「ヒロシマ」だけでなく、そのあと私たちがどのような時間を過ごして人の息づく営みを取り戻して今を生きているかという「ひろしま」も抱合する、総体としての「広島」を知ってもらいたいということです。

今回、広島を訪れてくれた青年たちは、その「広島」の一端を確かに感じてくれたのではと回顧しております。平和公園散策や伝承者による被爆体験講話、平和記念資料館見学を通じて「ヒロシマ」を知り、また、戦後

広島の人々が育んだ食文化であるお好み焼きや、ホームステイ体験を通じて人の営みのある「ひろしま」を感じ、その総体としての「広島」をきっと感じてくれたのではないかと思います。それは、被爆三世である私の話に真摯に耳を傾けてくれ、ホストファミリーと笑顔で語り合う、青年たちの姿からしっかりと感じ取ることができました。

私にとって、初めて実行委員長として実施する地方プログラムとなり、諸々の行き届かない点はあったかと思いますが、それでも「『広島』を知ってくれた」青年たちには、心から感謝を伝えたいです。



大分県（バーレーンとメキシコの参加青年）

月 日	時 間	活動内容
2月21日 (金)	11:00-12:45 14:45-15:15 15:45-17:00	羽田空港より大分空港へ (SNA091 便) 尾野賢治大分県副知事を表敬訪問 岩田高校訪問し、学生と文化交流
2月22日 (土)	10:00-16:00 19:00-20:30	臼杵市にて大分県連合青年団と交流 ・石仏拝観 ・街並み散策 ・うすき雛づくり体験 歓迎会及びホームステイマッチング
2月23日 (日)	終日	ホームステイ
2月24日 (月)	8:00 10:30-11:50	ホームステイ家庭より集合 大分空港より羽田空港へ (JAL664 便)

受入れ実行委員代表（大分県 IYEO 会長）：

2020年2月21日、希望溢れる若者たちが大分県にやって来ました。

今回「世界青年の船」事業の地方プログラムとしてバーレーンとメキシコの若者を大分に招くにあたり、実行委員会では「若者の力」を感じられるプログラムにしたいと考えていました。

初日の副知事への表敬訪問を経た後、大分県内でも英語教育に熱心な岩田高校にて交流を実施しました。高校の受入れクラスの担当教諭の意向もあり、ほとんどの場面で通訳なしでのプログラムでしたが、大分を紹介するプレゼンテーションを全て高校生の英語のみで行い、その後の交流も高校生が自らの力で外国青年と交流する貴重な機会となりました。

夕食プログラムではバーレーン青年の一人が誕生日だということを知った地元大学生が、彼女のために急遽ブーケとメッセージカードを準備したサプライズでの誕生日パーティーとなりました。英語・アラビア語・スペ

イン語・日本語での誕生日を祝う歌が歌い継がれ、その場を共有した全ての人々が繋がっている感覚を共有する一幕でした。

二日目は臼杵市にて、早咲きの河津桜や菜の花を横目に、青年団体との交流を実施しました。地元で活動する大学生が中心となっている青年団体にとって国際的な交流機会が少ないものの、外国青年に自分たちの想いを伝えたい、仲良くなりたいとの想いは言葉や文化を超えて届いたように感じられました。

24名の青年は、21家庭に分かれてホームステイしました。我が家でもバーレーン青年のホームステイを受け入れ、マイナス3℃の山に登ったり、地獄めぐりをしたり、高崎山自然動物園にて日本猿を見たりと、日本での最後の休日を楽しむ時間となりました。

大分プログラムを通じて、彼らの笑顔は、長い船旅の疲れを感じさせず印象的でした。彼らと何処かで会える日を楽しみに、世界で羽ばたくことを目指す若者を大分から応援し続けたいです。

